

ロヅラ、などと記紀に出ているように、トコロヅル（オニドコロ）がシタダミのはいつくばっているようにはっているとたとえたシタダミは、これも巻貝でニシキウズ科に属し、キサゴの仲間でもシタダミとよばれているものである。これも恐らく昔は食用にしただろう。インダタミという名の貝もこの仲間だが、これもいかにも打ってつけだが新らしい名であるから論外である。シイの仲間のあのささくれた殻斗はシタダミの印象であり、それから顔を出した実の存在はツブの印象であろうとすると、これはマテと相俟って甚だ可能性を増してくる。まして縄文晩期に米が揚子江流域から導入されて生活が豊かになる前には、これらの貝とシイとは互いに重要な食糧的意義を持っていたとみると、生活に即した名として名の起源の法則とも一致する。

まとめると縄文終期から晩期に少くとも北九州でシイと食用貝との命名上の関連が生じた。それは次のようである。

マテガイ	→	マテジイ、マテバジイ
シタダミ	+シイ	→ マダジイ
タニシ（ツブ）	→	ツブラジイ

因にタニシの語はツブより新らしい筈である。それは海岸生のニシが先で田にみつかるようになってタニシであるから、水稻耕作が導入されてから生じたツブの生活環境の拡張、即ち水田への進出、その利用でタニシの名が意味を生ずるからである。

またこれも一つの疑問であったことだが、神武天皇の例の宇陀の高城に鳴わな張るの歌の中に、瘦せたタチシバ即ちブナに対比して太ったイチサカキが出てくる。これは私は以前にイチイガシと考えた。今もそれでよいのだが、イチイガシはイチガシ、イチは乳で甘い実のカシでなければならぬのに、どうして他のカシのドングリとそうもへだたりのない今のイチイガシを甘いカシというのかは私に疑問であった。今にして思えばマテバシイこそイチサカキでもあったのではないか。神武天皇の歌もそれであるなら一層適切である。そして後世どこかで今のイチイガシを果実以外の点で認識するようになって、マテバシイのイチサカキが転用乃至は誤用されたものであろうか。カシ類中、葉の性質が一番マテバシイに似ているのはイチイガシであることは一つの手掛りと思う。

（東京大学理学部、植物学教室）

□植物形態学会会報「かたち」 1968年2月発刊。上記の会の機関誌、まだ4頁のパンフレット。論説として、系統形態学への示唆(西田誠)、発生途上でのゴマの胚の方向転換について(埴順)、東北大、理学部、生物学教室、形態学研究室の紹介、写真から線画をつくる方法(福田泰二)、各大学紀要にのった形態学関係論文リストなど内容充実。今のところ年2回発行の予定。会員にのみ配布。申込は東大、理学部、植物学教室内系統・発生研究室気付。会費年500円。

(前川 文夫)